とある超人の地震人間

白猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある超人の地震人間

【Ｎコード】
Ｎ６１９３Ｓ

【作者名】
白猫

【あらすじ】
総人口２３０万人を誇る科学の街、学園都市。そのうち実に八割は学生で超能力開発が日常的に行われていた。そんな街で、最大原石と呼ばれる削板軍覇と双璧を成す、もう一人の最大原石がいた。彼の名は神成総司。これは、そんな彼がさまざまな事件に巻き込まれる物語。強い力を持ちながら、実はとってもお人よしな、困っている人を助けずにはいられない。そんなお話

主人公設定

神成（カミセ）　総司（ソウジ）

性格・・・とにかくだらけている。しかし、やるときはやる。テンションがあがると・・・。困っている人を放っておけない。かなりのお人よし。キレるとかなり怖い。

好きなもの・・・新しい能力の使い方、応用を考えること、コーヒー、お菓子全般

嫌いなもの・・・動くこと、面倒なこと

能力・・・グラグラの能力。　大気を自由に操る、全ての振動を操る。応用が結構できる。

詳しく言うと大気＋全ての振動、又は揺れを操ることができる。

削板軍覇とはかなり仲がよく、一緒に修行したりしている。最大原石だけあってかなりの研究者から狙われている。

高校２年　後に長点上機学園に所属する事になる。

身長　１６５ｃｍ

顔は　当麻と軍覇をたして２でわった様な感じ。

能力に目覚めたのは１０歳　能力が他人にバレることなく１６まで何とか生活していたが

とある出来事から能力がバレてしまい、学園都市に行くことになった。

もう一人の最大原石　能力測定

「君には常盤台中学に行ってもらう」
「は？何で？」
「君の能力は強すぎてここでは測れない」
（面倒くせェ…）

そして今、常盤台中学にいる訳だが・・・。
「なんだこりゃ！？。なんでこんな鋼鉄の壁がそびえ立ってんだぁ？」

「君の能力が強すぎるから、こうでもしないと測れないんだ。がんばってくれよ。」
・・・だそうだ。本当にめんどい話だ・・・。

『これより神成総司の能力測定を開始します。グラウンドにいる人はご退場ください。』

さっさと終わすか・・・

いつのまにか周りには観客が集まっていた。
「よし！それじゃあ7割位にしておくかぁ。」
そう言って腕に力を込め思い切り目の前の鋼鉄の壁に向かって、大気を殴りつけた。

バキィ！！！！ズガァァァン！
そんな音とともに視界が悪くなり、そして再び目の前が見えるようになるとそこには・・・・

校舎の体育館を全壊させたうえに一直線に地割れをおこし、無残な姿になったグラウンドがあった・・・。

「なんじゃこりゃぁ！！！！！！！こんなに威力あったっけ？・・・どうしよう！？こんなの修理するお金ないぞ！・・・はぁ～めんどうだ・・・」

そんな中、どこからか機械音が聞こえてきた

記録　衝撃　測定不能

ＡＩＭ拡散力場　測定不能

能力系統　不明　空間に何らかの影響あり

総合評価ＬＥＶＥＬ５

もう一人の最大原石　能力測定（後書き）

中途半端に終わりましたが次の話で続きをしっかりとしますので・・・

・

言い訳をしますと時間がなかったもので進みませんでした・・・

次からは８０００文字程度を目指してがんばります！！

始まりはすべて偶然でそれは奇跡のめぐり逢い

「どうしよ・・・はぁ～」
ん？何を気にしているって？それはなぁ・・・

「この学校の修理どうすっかってことだ！！奨学金とか合わせてもまだ少し足んねェしなぁ・・・大体なんだ？いきなり能力測るとか言って外からこっちにすむことになるし～面倒だなぁ・・・」
この男、のんきなものだ・・・

？「君！この修理費はこちらでなんとかするから、長点上機学園にこないか？」

「え！マジで？なら別にかまわないんですがねぇ」

「では入学手続きは後ほど学校に呼ぶからそれでかまわないね？」

「了解しましたっす！ありがとうございます！じゃあ後ほどよろしくお願いしますね！」「ではまた」

と言うことで長点上機学園に入ることになったが正直良いんだか悪いんだか・・・

「んじゃ帰るとしますかぁ～ってあれは超電磁砲か？やべぇかもなぁばれない内にっと・・・」
しかし・・・
「アンタ！これはどうゆうこと！？まさか一人で戦争始めるっての

？」

「うっぜえ～すんませぇんちょっとミスっただけでぇす」

「ちょっと！ふざけてんの！？いいわだったら私と勝負しなさい！」

「ちょっと待てなんでそうなる！？面倒だこいつ・・・」

窓の無いビル

学園都市の最大権力者、学園都市総括理事長。アレイスター・クロウリー

世界最高の科学者としての側面も持つ、

男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』。

「ふむ・・・原石・・・アレとの接触を早急に進めるとしよう・・・」

始まりはすべて偶然でそれは奇跡のめぐり逢い（後書き）

これからは大体二週間に１回程度の更新だと思います！
２０００文字程度になると思います。

ＬＥＶＥＬ５と言うコト

結局あの後、白井とか言う奴やら周りの奴らに勝負を止められ
なぜか超電磁砲達と遊びに行くことになっちまった・・・まったく
面倒だ・・・しかも序列第三位だとさ…

ん？なぜ書かないのかって？それは作者の都合だ！！

「は、始めまして！初春飾利です！」

「どうも、始めまして。初春のクラスメートの佐天涙子で～す。
ついでにＬＥＶＥＬは０で～す」

緊張しているのが初春で何かいじけてんのが佐天らしい。
とりあえずこっちも自己紹介すっかなぁ～

「私は御坂　美琴、よろしくね。初春さんに佐天さん」
なに！先に言われただと！まぁいいか。

「神成総司だ。よろしくな！」

「あの！神成さんって新しいＬＥＶＥＬ５の人ですよね！？序列第
三位の！」

初春が目を輝かせて聞いてきた。御坂はキレ気味だが白井に押さえ
込まれている。
情報伝わんの速すぎじゃねぇか？
一方、佐天の方はあまり面白くなさそうにしている。

「まぁ～そうだけど…」

「さ、佐天さん！本物ですよ！」

人の前で言うのは失礼じゃないのかな…？

「こんな所で立ってるのも何だしゲーセン行こっか？」

「え？」

御坂の突然の提案に皆驚いた顔をしている。
つうかゲーセンって…もう少しまともな所に行ったほうが…

「何かイメージと違いましたね。」

「そうだねぇ全然お嬢様って感じじゃないし～」

「上から目線でもありませんでしたねぇ。」

初春と佐天から、そんな会話が聞こえてくるんだが…。

「どうぞ」

女性が佐天にチラシを渡してくる。
俺はそれを後ろから覗き込んでみると、どうやらスイーツのチラシのようだ。

「あ、見ますか？」

「ああ、ありがとう」

佐天がチラシを渡してくる。
優しいなこの娘…はっ！？いかんいかん！

「あ、すいません…あの…御坂さん？」

佐天が御坂にぶつかってしまい、謝るが御坂は気づかずチラシを見つめている。
その視線の先には、安っぽいカエルのキャラクターが描いてあった。

「あの…もしかしてコレ欲しいんですか？」

「え！？いや、違うわよ！だってカエルよ！？両生類よ！？
どこの世界にカエル好きな女の子がいるのよ！？」

その時、御坂のカバンに付いていたストラップが揺れた。
ストラップはなんと、可愛らしい両生類のカエルだった。

「あ…」

「人が多いですねぇ～何かあるんでしょうか？」

「そうですわね。私、ベンチを確保してきますわ」

「あ、私も行きます！佐天さん！私の分もよろしくお願いします。お金は後で渡しますから！」

「ちょっと初春！」

佐天が初春を呼び止めようとしたのだが、御坂を見て身を引いた。御坂は何だかとっても妙にそわそわしていた。

「えっ何？どうかした？」

「いえ、あの…順番変わりましょうか？」

「え？いやいいわよ！私はクレープさえ買えればいいんだから」

御坂は一瞬嬉しそうな顔をしたのだが、すぐに冷静を装った。

順番は進んで、佐天の順番が来た。

「おめでとうございます！コレ、最後の一個なんですよ～」

「え？最後？」

その時、御坂は体全身から力が抜けて倒れた。

全てに絶望しているような感じに見える。

「あの～…コレあげましょうか？」

「いいの！？ありがとう！」

御坂が佐天の手を取り何度も振り回す。
そしてカエルのストラップを受け取るとスキップでベンチに向かっていった。

「そういえばあの銀行、どうして昼間からシャッターを閉めているんでしょう？」

「確かにな…強盗とかな、いや…まさかなぁ～」

「そんなわけないじゃないですか」

佐天が笑いながら返してくる。
まぁ確かに強盗は無いだろうなぁ～…。
嫌な予感がする…。

ドカァァン！

突然、銀行のシャッターが吹っ飛んだ。
中から三人組が出てきて、走って逃げようとしている。

「初春！あなたは警備員（アンチスキル）に連絡を！」

「はい！」

白井がすごい速さでクレープを食べ、強盗の方へ走っていく。

「黒子！」

「お姉様は待っててください！神成さんにも見せてあげますわ、風紀委員の仕事を」

「おやおやこりゃまた面倒なことがおきたなぁ…」

「風紀委員（ジャッジメント）ですの」

白井が腕章を強盗に見せる。
強盗達は互いに顔を見合わせると爆笑し始めた。

「おいおい、風紀委員（ジャッジメント）も人手不足かよ。
おい！嬢ちゃん！とっとと、どっかか行かねぇと怪我しちゃうぜ！」

不良が白井に殴りかかる。
が、白井はそれをあっさり回避して相手を倒す。

「そういう三下の台詞は死亡フラグですわよ」

「危険です！広場で待っていて下さい！」

「でも！」

初春とバスガイドらしき女性が何か言い争っている。
しかも二人とも凄い剣幕で…。

「どうしたの！？」

「男の子が一人居ないんです！」

大変なことになっちまったな。
どうやらツアーに参加していた男の子が一人足りないようだ。

「探すわよ！」

「私も行きます！」

「え？でも…」

「行かせて下さい！」

「分かったわ！」

そして男の子の捜索が開始された。

「今更後悔しても遅ぇぞ！」
強盗の手に炎が生まれる。
（発火能力者（パイロキネシスト）…まったく）
考えた後道路の方に走り出す。
「な！？逃がすかよ！」
強盗は一瞬怯むがすぐに白井に向かって炎を放つ。
炎は白井を追うように飛んでいく。
…が
「誰が、逃げますの？」
炎に当たる直前に、白井は空間移動（テレポート）をして、強盗の後頭部に蹴りを入れた。
そして倒れた強盗に太ももに仕込んでいた金属矢を空間移動させ強盗の服を地面に縫い付けた。
「これ以上抵抗するようなら、次はコレを体内に直接空間移動させますわよ」
「こっちにはいないぞ！」

「こっちもいないわ」
小さい男の子はまだ見つからない。
何処にいったんだ…？
「駄目ぇぇぇぇ！！」
突然響き渡った佐天の声。
視界に入ったのは、強盗の一人が佐天を蹴り飛ばした所だった。
強盗はそのまま車に乗る。

「黒子！！」
「え？あ…」
「こっからは私の個人的な喧嘩だから悪いけど手、出させてもらうわよ」
御坂が電気を体に纏いながら歩いてくる。俺もムカついてきている。
「俺にもやらせてくれ！あんなことした奴はこらしめないとなぁ！！」
「お、思い出した！風紀委員には捕まったが最期、
身も心も踏みにじって再起不能にする最悪の空間移動者がいて」
「誰のことですの？それ」
「更にはその空間移動者の身も心も虜にする最強の発電能力者（エレクトロマスター）

がいて」

白井はその言葉を聞いて笑う。

「そう、あの方こそが学園都市２３０万人の頂点、８人のＬＥＶＥＬ５の第４位」

御坂がポケットからコインを取り出し指で弾く。

突っ込んでくる車に対してもう一度コインを弾いた。するとコインは音速を超えるスピードで飛んでいき車を吹っ飛ばした。

それとほぼ同時に俺は腕を振りかぶる。そして、大気を殴りつけた。すると、大気にひびが入り、衝撃波が発生する。

「『超電磁砲（レールガン）』、御坂　美琴お姉様。

常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫ですの」

「それと、新たなＬＥＶＥＬ５。地震人間、神成総司さんですの」

「…すごい」

「貴方の能力も中々のものでしたわよ」

連行されていく発火能力者（パイロキネシスト）に向かって白井が呟く。

発火能力者は白井の方を見る。

「ＬＥＶＥＬ３といったところでしょうか。能力に有頂天になる余り道を違えてしまったようですわね。
しばらく自分を見つめ直して下さいな」

そう言って白井は発火能力者の所から去っていく。
発火能力者は小さく唇を噛んでいた…。

「本当にありがとうございました！」

「い、いえ、そんな…」

佐天が助けた子供の母親が佐天に頭を下げている。
しかし、佐天は困惑している様子だ。

「本当に何とお礼を言っていいか。ほら、あなたも」

「お姉ちゃん、ありがとう！」

子供が笑顔で佐天に礼を言って佐天が頬を染める。

「はあ～…」

「お手柄だったね佐天さん、すごくかっこよかったよ」

「え？」

御坂に褒められた佐天が恥ずかしそうにうつむく。

「御坂さん達も…」

「お姉様！」

佐天が何か言う前に白井がそれを遮って御坂に飛びつく。
抱きつかれた御坂は引き剥がそうとしている。

「御坂さんも、すっごくかっこよかったです！」

佐天がそう言って笑った。

ＬＥＶＥＬ５と言うコト（後書き）

原作を読みながらなので、よく見たコトがあると思います！
次回は、いよいよ魔術サイドか！？

なるべく早く更新したいと思います！

では、また次回・・・

魔術師

「ん～何かいまひとつだなぁ～」
そう。今俺は、学園都市で最もおいしいコーヒーと、それにあうお菓子を
現在進行形で探していたりするのだ！
しかし、いまだにこれだ！と言うようなのを見つけられずに夕方になりつつある…

「ま、うまいのは買ってあるしいっかな…なんだかんだで第七学区にきちまったしなぁ～・・・・・・はァァ？何で寮が燃えてるんだ？」

誰かいるなら助けねぇとな・・・
能力を足に展開し、寮の燃えている所に一気に飛び上がる。
よく見ると、男が二人その炎の中心にいた。

「大丈夫か？これは…火事か能力者の仕業だな…？」

「おいお前！逃げろ魔術師だ！」

「はぁ？ここは科学の街、学園都市だぞ…んなもんいる訳ねぇだろ？」

そう。ここは科学の街。その住人にとって魔術などありえない存在であるため、神成はそれを信じなかった。

その時。

誰かが歩いてくる音が響く。その音は徐々に二人に近づいてくる。
明らかに変な格好をした赤髪の神父風の男が二人を見下ろしながらこちらに向かってきた。目の下にはバーコードのようなタトゥーが入っており、タバコを口にくわえている。

「こいつが魔術師？笑わせんなよ…ただのおっさんじゃねぇかよ。」

「おい！本当にそいつは魔術師なんだ！」
男は必死にそう叫んでくる。

「まあ二人ともすぐに殺してあげるから信じなくてもいいんだどね。」
神父？はくわえていたタバコを地面に放り投げる。
そして…
「炎よ」
神父？は、なにやら語りだした。
右手には、灼熱の炎剣が生み出された。それの温度は正確には分らないが、当たった瞬間普通の人間をなら確実に溶かしてしまうでろう。普通の人間なら…
「巨人に苦痛の贈り物を」
二人に向かって鞭のように振り払われたそれは、直撃した瞬間バンッという音と共に爆発し、辺りは黒煙に包まれる。
「ふぅ、少々やり過ぎたか。まぁ３０００℃の炎の前では消し炭だろうけど」
神父の男は勝利を確信していた。辺りの壁は、その炎によってろうそくのようにドロリと溶けている。とても普通の人間が生き残れる状況ではなかった。　普通の人間ならば・・・
しかしその確信はあっけなく崩れさる。

どろどろに溶けているはずの二人は、何もなかったように平然と立っていた。
男はその光景を理解するのに時間がかかった。そして理解すると同時に目が大きく見開かれる。
「何！？　そんなばかな！　確かに命中したはずだ！　お前達一体何者だ！」
男は驚愕し、そして取り乱した。自分が殺したはずの人間が無傷で立っていたのだから、仕方ないだろう。
「なにびびってやがんだ…あの修道服をぶち壊したのだって、この右手じゃねぇか」
隣の高校生はそうつぶやいた。
それには気にせず、神成はあきれたように神父に語りかける・・・
「オイ…お前この俺を誰だと思ってる？学園都市２３０万人の頂点。ＬＥＶＥＬ５の第三位。　地震人間って呼ばれてんだ。んなもん効くわけねぇだろ！」
「くっ…こうなったらこちらも本気で行かせてもらうよ」
神父は歪んだ顔で何かをはじめようとする。
「おい！そこの高校生！何をするためにここにいるんだ？」
「俺は、そこに倒れてるインデックスって奴を助けたいんだ！」
「んじゃあ俺が隙をつくるからその隙に助け出せ！」「でもそれじゃお前が…」
「大丈夫だ。信用しろ！あの子を助けたいんだろ？」

「わかった・・・すまない。」

その時、神父が何かをつぶやき始めた。

「世界を構成する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ
それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり
それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり
その名は炎、その役は剣顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ！」

男がそう叫ぶと同時に、炎の怪物が出現した。

「魔女狩りの王　イノケンティウス。その意味は“必ず殺す”。」

「殺せ。魔女狩りの王（イノケンティウス）」

男の声に従って炎の怪物が滑るようにこちらに向かってくるが、二人はうろたえない。

隣の高校生が、右手で触れると高い音を上げてイノケンティウスは飛び散った。

「はっ、たいしたことねーな」

右手の効力に高校生は安心する。

しかし

「甘い！」

「なにっ…」

イノケンティウスはゴポゴポと炎を噴き出し再び復活した。どうやら再生速度が右手の処理速度を上回っているようだ。

「くっ」
再び高校生が手をかざすも、消えては復活するため効果がない。
「おい！下がってろ！巻き込まれるぞ！」
その声を聞き、高校生は神成の後ろにうまいこと滑り込んだ。
すかさずイノケンティウスが追ってくるが、もう遅い。
神成は右腕をかまえると目の前の大気を殴りつけた。
あまりの衝撃波に、イノケンティウスごと神父を吹き飛ばした。

「じゃあな。エセ魔術師」
そう、つぶやきながら…

「そういえばお前、名前は？」

「俺は上条当麻　それよりインデックスは！？」
当麻は、心配したように聞いてくるが
「安心しろ。そいつなら巻き込まれないように攻撃したからな！」
そう。大丈夫であった。

「そうかなら一安心だ…それより背中の傷をどうにかしないと…」
「なんだあの神父…こんな女の子に手ェ出すほど腐ってんのか？とりあえず
治療しねぇとな」

「そうだな…とりあえずここから離れよう」

そして二人は寮を後にするのであった・・・

魔術師（後書き）

能力解説

なぜ炎があたらなかったのか　それは
大気を操り、自分の周りを、薄い空気の膜で覆っていたからです！！

他の応用は後ほど

空気振動　これが後に・・・
では、また次回！

一時の休息　前編（前書き）

すいません遅れました・・・
色々と忙しくて・・・では！どうぞ～！

一時の休息　前編

夜。表通りから消防車と救急車のサイレンが響き渡り、通り過ぎた。学生寮はほぼ無人であったが火災報知器がなってしまい、野次馬やらなにやらで学生寮はすぐに人だらけになってしまった。
上条と神成は血まみれのインデックスを抱えており、傷口を治療する方法を考えていた。
はじめは魔術を信じてはいなかった神成だったが、インデックスが抱えているものを教えてもらいやっと少しだが信じるようになった。

「しっかしこのままほっとくとやべぇぞ・・・」

「確かにはやく治療しないとインデックスが危ない・・・でもどうすれば・・・」

その時、インデックスが弱々しく話し出した。
「だい、じょうぶ。だよ？　とにかく、血を止めることができれば・・・」

しかし、彼女の怪我は素人から見ても分かるほどに酷く具体的にどうすればいいのか、結論が出ずにいた。
そして、思いついた一つの答え　『魔術』

「おい！聞こえるか？お前の１０万３０００冊の中に、治療する魔術とか無いのかよ？」

上条や神成にとって魔術のイメージといえばゲームの魔法などでし

かない。
インデックス自身は魔術を使えないことは二人とも知っていた。
ならば自分たちなら使えるのでは？と思っていた。
激痛より失血のせいで蒼ざめた顔をしているインデックスは唇を震わせ
「・・・ある、けど」
一瞬喜びかけた二人だが『けど』という言葉が気になる。
「君には・・・無理。だって君の右手がきっと魔術を邪魔する」
「おい、上条どう言う事だ？」
「俺の右手は幻想殺し（イマジンブレイカー）って言ってそれが異能の力なら例え神の奇跡だろうと
問答無用で打ち消しちまうんだ・・・」
「そりゃすごいってもんじゃねぇぞ！チートだ！だからあの神父の攻撃も当たらなかったのか
よし。なら俺が変わりにやろう！」
「・・・ちがうの。超能力者そのものがだめなの。」
インデックスが体を震わせ
「魔術って言うのは君たち能力者みたいに「才能ある人間」が使うものじゃなくて「才能無い人間」が
それでも「才能ある人間」と同じ事がしたいからって生み出されたものの名前が　『魔術』」

上条たちは絶句した。確かにこの街の人間は明らかに違う。能力開発を受けていれば、それがスプーン一つ曲げられなくてもこの街では最弱の「能力者」になるからだ。

「ちくしょう・・・何でこんな・・・こんな事ってあんのかよ！！」

しかし、神成は冷静にこう答えた

「なら能力開発を受けてない、例えば先生とかならどうなんだ？」

「えっ・・・うん。それなら大丈夫。方法と準備さえ出来れば何とかなる」

「それなら小萌先生の家が一番近い！そこに行こう！」

こうして三人は小萌先生の所に行くことになった・・・・・

一時の休息　前編（後書き）

今日はここら辺で一回、区切ります・・
次の話はすぐに投稿するのでお楽しみに！
つぎは神崎辺りまで出ます！！

一時の休息　後編（前書き）

はい、投稿です！

結構時間かかりますね・・・むむむ！

ではどうぞ！

一時の休息　後編

「あの先生この時間でもう寝てるなんて言う事ねぇよな・・・」

上条は一人の教師の顔を思い浮かべながら考え込んでいる。

そして

「ここか・・・。」

路地裏から歩いて１５分ほどの所に、それはあった。

見た目この街に合わない今にでも崩れそうな超ボロい木造二階建てのアパートだった。

一つずつドアの表札を確かめ、そして見つけた。

しかし、チャイムを鳴らしても出て来なかった為に神成が能力を発動させようとした所

「はいはいは～い対新聞屋さん用にドアだけ頑丈なのですー今、開けますよ？」

やっとドアを開けてれた。

「あ、上条ちゃん。と・・・？「神成です。」新聞のバイトですか？」

（小さすぎねぇか？この幼女が先生か・・・まぁーこの街では普通なのか・・・？）

何やら考えこんでいると隣の当麻が

「ちょっと困っているので入りますね先生」

二人が入っていくと

「ちょちょちょっとー！！」

小萌先生は立ちふさがるようにして

「いきなり部屋に入られるのはこまります。別に部屋が汚いとかビールの缶が散らばっているとかでは無くてですね！」

「先生！見ての通り非常事態なんです」

背中の傷を見た小萌先生は納得してくれた。

そして詳しい説明をした後、上条たちはそこから立ち去った。

「今日は色々ありがとな。正直言って危なかった・・・」

「気にすんな当然のことをしたまでだから何かあったら呼んでくれ。一人で抱え込めるほどの事では無いからな・・・」

そんなやりとりを交わし、二人はお互いに分かれていった。

翌日

６００メートルほど離れた、雑居ビルの上で、ステイルは双眼鏡か

ら目を離した。

「禁書目録に同伴していた少年たちの身元を探りました禁書目録は？」

ステイルはすぐ後ろまで歩いてきた女のほうを振り返らずに答える。

「禁書目録はなんとか生きてるよ。・・・だが生きているとなると向こうにも魔術の使い手がいるはずだ」

神裂は無言だった。

彼女の性格からして本当は誰も死ななかった事に安堵しているが、それは一時的なもので今はそんな余裕はなかった。

「それで神裂。アレは一体何なんだ？」

「それですが、右手の少年の情報は特に集まってません。少なくとも魔術師や異能者といった類ではないという事になるのでしょうか」

「何だ、もしかしてアレがただの高校生とでも言うつもりかい？」

ステイルは口にくわえた煙草の先を睨んだだけで火をつける。

「それで、もう一人の奴は？」

「それが・・・何らかの操作がされているのか特に分かってはいません・・・」

そうか。とはき捨てるようにつぶやいた。

「しかし驚きました。いきなりあなたが飛んでくるんですから。」
実はあの後かろうじて神埼に助けられたステイルであったがあのまま気がつかなかったら死んでいたかもしれなかった。
「ふん。しかし情報操作と言うことは裏が関わっているかもね・・・」
裏の情報・・・。この学園都市は超能力者量産機関という裏の顔を持つ。
名実ともに世界最高峰の魔術グループでさえ、敵の領域では正体を隠し続ける事は不可能と判断し、禁書目録の事は伏せるとはいえ、事前に学園都市上層部に連絡を入れて許可を取っていた。
「一人は上層部もしくは暗部の。もう一人は他の魔術組織が意図的に封鎖しているのかな？神裂、この極東には他に魔術組織が存在するのかい？」
ここで彼らは『右手の少年は外の別の組織を味方につけている』そして『もう一人の少年は学園都市側が情報封鎖している』と踏んだ。
と言うより、勘違いしていた。
「……この街で動くとなれば、何人も学園都市の警備のアンテナにかかるはずですが。・・・敵戦力は未知数対してこちらの増援はナシ。難しい展開ですね。」
「・・・。楽しそうだね・・・あの娘はいつも楽しそうにしている」

神裂はステイルの後ろから、６００メートル先を眺める。
双眼鏡や魔術を使わなくても、視力８．０などの人間離れした身体能力をもつ聖人の彼女には鮮明に見える

「・・・僕達は一体いつまでアレを引き裂き続ければいいのかな・・・。」

「複雑な気持ですか？　かつて、“あの場所にいたあなたとしては”・・・・・」

「いつもの事だよ・・・・。」

俺は、上条とインデックスの事が心配になってあのボロアパートに向かっているのだが・・・
なんと偶然にも前方にいるではないか！

「お～い！上条！インデックスは、大丈夫だったのか？姿が見えないんだけど・・・」

「まぁ大丈夫だったな・・・元気がよすぎるがなぁ」

「そうかそうかなら良かったじゃん！それと一つ気になる事があってさ～」

「ん？どうしたんでせうか？」

あのさ。と一言つぶやいてから・・・

「その右手、神の奇跡でも打ち消せるらしいじゃん。って事は、神を殺したことあんの？」

「いや～この右手は本当は幻想殺し（イマジンブレイカー）じゃ無くてさ・・・」

本当は、と語ろうとした時・・・・・

一人の女がいつの間にか現れていた上に人がまったく居ないことに

気づいた・・・・

一時の休息　後編（後書き）

今回はここまでです！

何やら幻想殺しの本質が分かりそうでしたが、そこは
やはり語るのはさせない事にしました。

字を伏せて語らせようとも考えました！しかし、謎を残しておきたいなぁと
思いました次第です・・・！

ではでは～また次回！

それぞれの思い（前書き）

やっぱり書くのは大変ですね・・・
楽しいのでいいのですけどね！

では！　どうぞ～

それぞれの思い

「おい上条。気づいてっか?あの女以外誰もいないことに・・・。魔術師か!?」

どうやら当麻は気づいていなかったらしく、今言われて気づいたようだ。

「ステイルが人払いのルーンを刻んでいるだけですよ」
女はいきなり語りかけてきた。

「この一帯にいる人に『何故かここには近づきたくない』と言うように集中を逸らしているだけです。
多くの人は建物の中でしょう。ご心配なさらずに。」

上条達は直感的にコイツはヤバイと感じ取った。
女はTシャツに片脚だけ大胆に切ってあるジーンズという変な服装であった。
しかし、腰からぶら下げてある二メートル以上はありそうな日本刀があり、普通では考えられない程の殺気を放っていた。

「・・・テメェは?」
当麻が警戒しながらつぶやいた。

「神裂火織と申します。・・・できれば魔法名は言わせないでください。」

二人は思わず息を呑んだ。
魔法名。魔術師にとっての『殺し名』だ。
「て事はテメェも魔術結社とか言う奴か？」
上条が言う前に神成が神裂に聞いてきた。
神裂は一瞬考えた後「ああ。インデックスに聞いたのですね？」
二人は答えない。
「率直に言って・・・魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが。」
冷たい殺気がより一層濃くなる。
「嫌だと言ったら・・・？」
「そうだ。そんな事聞けるかってんだ！」
「仕方ありません・・・」
その瞬間、斬撃が襲いかかってきた。
普通では考えられないほど大きな刀だと言うのに、普通では抜くことすらできないと思える刀なのに
次の瞬間。レーザーでも振り回したかのように辺りが引き裂かれ、
風力発電のプロペラが簡単に
音も無く斜めに切断されていく。
「やめてください。あなたでは聖人である私には勝てません。・・・

もう一度問います。彼女を保護したのですが。」

「また保護かよ・・・勝手なことばっか言いやがって。」

上条が神裂に向かって走っていく。そしてその斬撃を掴もうとする。その斬撃が異能の力なら消せると考えたからだ。

・・・しかし

斬撃を掴んだ　そこまでは良かった。だが逆に上条の右手が『裂けた』

そして二人は気づいた。正確には上条の血が付いていなければ気づけなかった　モノ

「な、なんてこった・・・アンタそれ・・・魔術なんて使っていなかったのか！？」

「ステイルからあなたの右手のことについては聞いていました。忠告しますが私の七天七刀は飾りではありませんよ。その先には真説の『唯閃』がありますから。何より私は、魔法名すら名乗っていません。」

「・・・あんたは何でそんなスゲェ力があんのにどうしてそんな事しか出来ねェんだ！！」

「私だって・・・！」

神裂は震える声で語りだした。

「本当は彼女を傷つけるつもりは無かった。あれは結界が生きてると思ったから・・・
私はあの子と同じ組織に所属しています。インデックスは私の親友なのです・・・。」

「今更何言ってんだ！インデックスが嘘を付いていたとでも言うのか！？」

「完全記憶能力。彼女は１０万３０００冊を記憶したせいで脳が圧迫されているのです。だから記憶を消して何とか生きている・・・。そして彼女は私たちを１０万３０００冊を狙う敵と思っている。だから最初から敵として憎まれたほうがまだいいと思ったのです。」

「馬鹿か！そんなのテメェらの勝手な都合だろうが！あいつが何回忘れようと何回でも友達になってやればいいじゃねェか！！」

「あ、あなたに・・・あなたに何が分かるんですか！」

神裂が攻撃を放った。だがそれ以上の何かが攻撃を無理やり捻じ曲げた。

「上条！下がってろ。コイツは俺が倒す！！」

「お前は大丈夫なのかよ！？こいつの攻撃は全然見えねェ・・・」

「安心しろ。こんな奴に負けはしない・・・インデックスを渡す訳にはいかねぇからな！」

瞬間、神成の体が一瞬ブレた
いや、正確には能力で高速移動した。と言う方が正しい。
「そんなにインデックスを保護してぇなら俺を倒してからにしろ！！！」
「望むところです。ならばそうしましょう。」

神成は足に能力を展開する。そして能力を一気に放つと音速の数倍で神裂に突っ込んでいく。

そして・・・

それぞれの思い（後書き）

今日はこんなところかなぁ～
次の投稿は日曜日です！！！もう半分は出来ているので残りを書くだけですが・・

さて！また次回お会いしましょう！

激突　そして語られる真実（前書き）

なかなか難しい・・・

では！どうぞ～

激突　そして語られる真実

「がっ！！ぐあ・・・！？」

神裂に音速の数倍の速さで突っ込み、腹を殴った。神裂は一瞬引きつった顔をするが、すぐに七天七刀で七閃を放つ。

だが、すぐに自分の周りを大気を固めたもので覆う。

当然七閃は弾かれて、その斬撃は別の所にあたる。

「さすがだな・・・その身体能力。聖人・・・だっけ？」

「えぇ。ですがその聖人を押しているあなたは化物ですね。」

「どうやら少々あなたを侮っていたようです。次は、こちらから行かせてもらいます。」」

「・・・ん？」

次の瞬間、神裂は間合いを一瞬で詰め、身体を信じられないスピードで動かし、神成に向かい凄まじい蹴りを放つ。

しかし、そんないきなりの攻撃にも関わらず神成は平然と立っていた。

「・・・な！？」

攻撃を防がれた神裂は驚きつつも蹴りから次の攻撃に移る。

「ならば！！」

神裂は拳を握り締めてそれを連続で放つ・・・

（効いていない！？）

ありえない出来事に驚きながらも刀の方で七閃を放とうとするがさっきまでいたはずの神成がいない。

（一体どこに・・・）

すぐに探そうとするがその必要はなかった。
何故なら神裂の後方３０メートルほどの所にいたからだ。

「そんな所に！！」

神裂はすぐに高速で移動する・・・だが

「オイ！ちっとばっか響くぞォ！！！」

その叫び声とともに左腕を右側に構え、そしてそのまま横の大気を
『殴りつけた』
大気にヒビが入り今までの激突が見劣りするほどに比べ物にならない
いような
すさまじい衝撃波が発生する。

（な、空間にヒビが・・・・！？）

神裂は反射的によけるのは不可能と判断して全力で防御した。
しかしそれを受け止められず徐々に押され、結局アスファルトの上を数十メートル吹き飛ばされ、近くにあったビルにめり込んだ。

「あ・・・。やりすぎたかもうチョイ手加減した方がよかったな・・・。」

神裂は、薄れる意識の中でその言葉を聞いていた。

「あれで手加減！？私の完敗ですね・・・。」

そう言って意識を手放した。

「お～い上条ありがとな！お前がいなかったらこの場所無くなっていたかも・・・」

あの攻撃のとき、当麻は神裂の十メートル程後ろで必死に攻撃の余波を打ち消していたから、だからこの場所は、地面が５、６０センチ程の陥没ですんでいた。

「まったくでせうよ！あんな原爆級の能力、街中で気軽に使うんじゃありません！」

「だから一応手加減したって・・・扱いが難しいんだからな！これ・・・」

などと話をしていると

「ん・・・私は…」

意識を取り戻したらしくビルから起き上がってこちらに歩いてきた。今にも倒れそうにふらふらとしながらも　しかし確実に、二人に歩み寄ってきて

「・・・後3日です。」

真っ直ぐに二人を見て話す神裂の言葉を二人して真剣に聞いていた。

「……3日後に記憶を奪わなければ彼女は死んでしまいます」

「ちょっと待てそれは１０万３０００冊を覚えてて脳がパンクするってことだっけ？８５％を使ってるとか…」

神裂に疑問をぶつける神成。

「えぇそうですが・・・」

「なら変じゃないか？1年で１５％なら5，６歳で死ぬだろ？それに人間の脳は元々１４０年位記憶出来て記憶そのものも保管する所が分かれてるはず・・・

テレビで言ってた話だけどな。」

驚きを隠せない神裂と当麻

「それでは私のやってきた事は！？」

神裂は全身から力が抜けていく感覚を覚えた。それは、科学に属する人間だから分かること。神裂たち魔術師が知らなくても、それは無理もない事だった。

そんな時当麻が

「ならインデックスが苦しんでんのは何か魔術がかけられてるってことか！？」

「おそらく・・・な。とりあえず上条！その右手でその魔術を解くことが出来るはずだ。なら話は早いインデックスを苦しめているのをぶち壊せばいい！」

「そうだな！インデックスを救い出そう。こんな馬鹿げた事は許せねぇ！」

「あなた達は協力してくれるのですか？こんな酷いことをしたのに・・・」

すると変なことでも聞いたかのような顔をして

「当然じゃないか！助けたいんだろ？」

二人の声が見事に合わさってそう答えた。

「ありがとございます…それと気になったのですが何故あなたには私の攻撃が効かなかったのですか？」

「なに。簡単なことだ俺の能力って自分でもよく分かんなくてさ・・・

何か気合で周りを大気で覆ったら何か防御できたみたいだな～。大体、演算なんかしなくても能力は普通に使えるし～まぁ原石らしいけどな～」

「そう…ですか。『説明できない力』の一つと覚えておきます。」

「何かかっこいいな！それ。よし！んじゃ～インデックスを助ける為の作戦会議だ！」

残り　3日・・・

激突　そして語られる真実（後書き）

どうですかね？楽しんでいただけたでしょうか？

今回は能力の謎についても少し書きましたが・・・

白ひげと言えばやはり定番の左腕での攻撃でしょう！

最後までほとんど左腕で能力をつかっていましたし～

それともう一つ・・・

うっかりＡＩＭバースト編を忘れていたのでインデックス救出が終わったら

話を途中に割り込ませますのでご勘弁を・・・

ＡＩＭバーストは結構面白く仕上がると思います！

ん～５０００字前後でしょうかね！

では！また次回お会いしましょう！

幻想御手　？（前書き）

テスト期間なので次の更新は少し遅れると思います。すいません・・・

でもなるべくがんばります！

それとこの幻想御手編は、時間軸がかなりおかしいのでその内直します。

本当にすいません。

では！どうぞ～！

幻想御手　？

「あちい・・・とってもあちい～」

これからまだ暑くなるのか・・・最悪だな～　昨日はなんか魔術師？なる人間に会っちまうし・・・

そんな事を考えていると携帯がなって

「お～御坂か・・・どうしたｎ「大変なの！佐天さんが…倒れたって！今すぐ来て！！」

「そうか……佐天が……」

御坂の電話で佐天さんが倒れたことを知った俺は病院に来ていた。

「ええ、絶対に犯人を見つけるんだと初春は木山先生のところへ」

「二人とも、ちょっといい？」

思いつめたような顔で御坂が席を立ち、歩いていく。

御坂に付いて行くと、すぐに屋上に着いた。

「お話って何ですの？」

「佐天さん、いつもお守り持ってたでしょ？」

フェンス越しに見える屋上からの風景を眺めながら御坂が続ける。

「アレね、お母さんに貰ったんだって。学園都市に来る前に」
「そんな話をお姉様に……」
「うん、多分……色々と話したかったんだと思う」
佐天の話したかったことが何なのかは分からないが。しかし、それはきっと能力関連の事なんだろう。
御坂がフェンスに手を掛けながら話を続ける。
「私、『超能力者（レベル５）』とか言ってるけどそういうところは全然駄目だよね」

「私はさ、目の前にハードルがあったらそれを飛び越えなきゃ気が済まないタチだから、『超能力者（レベル５）』もその結果なだけで、別に凄いとも思わなかった」
御坂は最初、『低能力者（レベル１）』だった。その後、想像もつかないような努力をして『超能力者（レベル５）』まで上り詰めたのだ。
「でも、ハードルの前で立ち止まっちゃう人もいるんだよね……。そういう人がいるってことを考えたこともなかった」
「レベルなんてどうでもいいんじゃない、なんて無神経な話だよね」

「だから、捜査に協力させて。佐天さんを助ける為にも。よろしくね」

「こ、こちらこそ」

微笑みを浮かべて言う白井に御坂がよろしくね、と言いながら肩に手を置く。その瞬間白井の顔が一瞬苦痛に歪むが御坂に心配を掛けない為か、すぐに引きつった笑みを浮かべる。

「よし。まずは『幻想御手（レベルアッパー）』を作った奴を見つけ出して、とっととこの事件を終わらそうな・・・」

「ちょっといいかい？」

屋上を立ち去り、病院の中を歩いている途中、突然後ろから声を掛けられた。

振り向くとそこには、御坂の大好きなキャラクター『ゲコ太』によく似た白衣の医者が立っていた。

「ッ！リアルゲコ太！？」

「お姉様、違いますの」

医者は、先に部屋に入っていった。なにやら話があるらしいので俺

達三人も医者の入った部屋に入る。

「これは『幻想御手（レベルアッパー）』被害者の全脳波パターンだ」

言いながらパソコンの画面を横にスクロールさせるカエル顔の医者。画面には複数の脳波パターンが並んでいる。

「脳波は個人個人で違うから同じ脳波パターンなんて有り得ないんだね？ところが、『幻想御手（レベルアッパー）』被害者にはある共通の脳波パターンがあることに気が付いたんだよ」

「どういうことですの？」

「誰か他人の脳波パターンで無理矢理脳が動かされてるとしたら、人体に多大な影響が出るだろうね？」

これが誰の脳波パターンか分かればいいんだが・・・

「『幻想御手（レベルアッパー）』に無理矢理脳をイジられて植物状態になってるってこと？」

「誰が何の為に……」

「僕は医師だ。それを調べるのは君達の仕事だろう？」

「特定の脳波パターンがはっきりしてるなら」

「初春に書庫（バンク）を検索して貰えば……あ　って、その初春がいないんですの」

「全く、何を騒いでるの？」

「あ、固法先輩」

一通り事情を説明して書庫を開いてもらう。

「なるほど…そういうことなら書庫へのアクセスも認められるでしょうね」

「書庫にデータがなかったら？」

「大丈夫ですわ。能力開発を受けた学生は勿論、病院の受診や職業の適正テストを受けた大人のデータも保管されているんですの」

「でも、何で『幻想御手（レベルアッパー）』を使ったら同一人物の脳波が組み込まれるのかな？」

「しかも能力のレベルが上がるなんて」

「パソコンだってあるソフトを使ったからって性能が格段に上がるわけじゃないわよね。ネットワークに繋いだならいざ知らず」

ネットワーク……もしかして・・・

「そうか。『幻想御手（レベルアッパー）』を使って脳のネットワークを構築してるのか？」

「でも、私達の脳はパソコンで言えばＯＳが違ってるみたいなものだから使っても意味ないんじゃないんですか？」

「パソコンのネットワークだってプロコトルによってそれぞれが繋がってる。つまり、特定の人物の脳波パターンがプロコトルの役割をしている・・・」

そこまで言って御坂がハッとした顔をする。

「そうか、ネットワークを繋ぐことで能力の処理速度を高めてるのね」

「恐らく、昏睡患者は脳の全てをネットワークに使われてるのね…出たわ！」

ピッと言う音と共に画面に脳波パターン一致率９９％と表示される。その人物・・・

「木山春生・・・！？」

「「初春さんが！」」

白井は初春と連絡を取る為に携帯を取り出す。

「繋がらないんですの！」

「警備員（アンチスキル）に連絡！木山春生の身柄確保！ただし、人質がいる可能性あり！」

「はい！」

白井は再び携帯で警備員に連絡を取る。
その間に俺は扉から外に出ようとする。

「何処に行くんですの！？」

「決まってんだろ？木山を追いに行くんだよ！」

「そうね、一般人を巻き込むのは気が進まないけど『超能力者（レベル５）』のあなた達がいてくれるなら力強いわ！」

「んじゃ！行ってくる」

１７７支部を出る。と、そこで御坂に引きとめられた。

「私もいくわ！」

「お姉様！初春も風紀委員の端くれ、いざとなれば自分で何とか・・・多分……何とか・・・運がよければ」

どんどん白井の声が小さくなっていく。無理も無いな…

「それに！一科学者の木山に警備員を退ける術はないかと！」

「何千人もの昏睡者した能力者の命が握られてるのよ！それに、何か嫌な予感がするの」

「なら、尚の事ここは風紀委員である私が！」

白井が食って掛かるが御坂が白井の肩に手をおく。

すると、白井はビリビリと身体を震わせる。ツインテールが触手のように揺れている。

「そんな身体で動こうっての？」

「お姉様……気づいて？」

「当たり前でしょ。アンタは私の後輩なんだからたまにはお姉様に甘えなさい」

黒子の額を指で押しながら御坂は笑う。

さて、さっさと助けに行こう・・・

幻想御手　？　～ＡＩＭバースト～（前書き）

今週はこれが限界です。本当にスイマセンです・・・

では、どうぞー！

幻想御手　？　～ＡＩＭバースト～

「お釣りはいらないわ！それよりも早くここから逃げて！」

「ちょ、ちょっと！お客さん！」

急いでタクシーから降りて現在木山と警備員（アンチスキル）が交戦中である道路の上へ向かう。上からは銃声が鳴り響いている。恐らく警備員のものだろう。これを木山に退けられるとは思わないが、鳴り止まないということは木山はこれを退けているって事か。

「黒子！状況は！？」

「信じられませんわ・・・木山春生が警備員と交戦中。それも能力を使って」

能力を使ってるってことは木山は能力開発を受けていたのか？確かにそれなら上の銃声が鳴り止まないのも納得できる。

「彼女、能力者だったの？」

「書庫（バンク）にはそんな記録はありませんが……。どう見ても能力を使っていますわ。それも複数・・・」

多重能力者（デュアルスキル）ね・・・　なるほど、分からん。

自慢じゃないが俺は頭があんま良くないからな…。

つまりあれか？能力を複数使えれば『多重能力者』って事か。

そんなことを考えながら階段を駆け上がり、上に着くと既に銃声は

鳴り止んでいた。ただ、立っていたのは警備員ではなく木山だった。

「警備員が全滅？」

「冗談だろ・・・」

道路の上には倒れている警備員達。そして、破壊された警備員の特別車両等が転がっていた。そして、木山の車の中にぐったりとしている初春の姿があった。

「初春さん！」

「心配するな、戦闘の余波を受けて気絶しているだけだ。命に別状はない」

立ち込める粉塵の中から現れた木山はいかにも余裕そうな表情でこちらを見ていた。

「いくら『超能力者（レベル５）』の君達でも私のような相手と戦ったことはあるまい。君達に一万の脳を統べる私を止められるかな？」

「当然だ。その為に俺達はここに来たんだからな」

臨戦態勢に入る俺達。まず最初に動いたのは御坂だった。しかし、走り出した御坂に対してどういう風に能力を使ったのか知らないが、木山は地面をえぐり取り御坂の動きを止める。そして、右手を前に差し出し手のひらから風を発生させる。それに対して俺は御坂の前に出て風の向きを上に変換し無効化する。

「驚いたわ…。本当に複数の能力が使えるのね。多重能力者だなんて楽しませてくれるじゃない！」

「私の能力は理論上不可能とされているアレとは方式が違う。いわば『多才能力（マルチスキル）者』だ」

言い終わると同時に木山の手からもう一度風が発射された。今度は吹き飛ばすような風ではなく、敵を切り裂くための風。それを左右に跳び避けた俺達はすぐに攻撃に移る。

「呼び方なんてどうでもいいわよ！こっちがやることに変わりはないんだから！」

そう言いながら電撃を飛ばす御坂だが、それは木山が作ったシールドにより防がれてしまう。

「どうした？複数の能力を同時に使うことは出来ないと踏んでいたのか？」

木山が不敵に笑う。そして、何かしらの能力を使い地面に亀裂を入れる。

この能力は…？

そんな事を気にしている暇はないな。このままじゃ落ちる。

そう思い御坂を見ると、磁力で体を支えていたので安心した後

自分の周りに小さな竜巻を発生させて、ゆっくりと降りていく。

御坂。確かに木山は厄介な相手だがそこまで苦戦することもないと思う

が・・・。

その時、石の柱に張り付いていた御坂がその一部分を切り取り、木山に投げる。が

木山は発火能力の応用によって出来た棒のようなもので横凪ぎに吹き飛ばす。

「あれ？！」

上から御坂の間抜けな声が聞こえたと思ったら、木山により柱から切り取られた石柱につかまったままの御坂が石柱とともに落ちてくる。

「御坂！ちょっと我慢しろよ！」

そう叫びつつ窒素の塊を瞬時に作り出し、それで御坂を助ける。

「ありがと！それにしてもいつ見てもすごい力ね…今度勝負しなさい！」

「こんな所でも勝負かよ・・・」

そんな様子を眺めていた木山だったが何を思ったか空き缶を浮遊させる。

「それは！」

間違いない。グラビトン事件の時の介旅の能力。ゴミ箱の中にあった大量の空き缶が宙に浮き、空き缶の形がみるみる内に歪んでいく。しかし、それは爆発しなかった。理由は簡単。御坂が電撃で吹っ飛ばしたからだ。

「大した力だな。だが、」

余裕の表情を崩さない木山。その手には一個の空き缶が握られている。

次の瞬間その手の中にあった空き缶が消えた。

それが空間移動によるものだと気づいた時には空き缶は既に後ろだった。

それを吹き飛ばそうとするが、御坂は何か秘策があるのか余裕そうな表情をしていた。

そして、ドゴッという音が辺りに響き空き缶が爆発した。

御坂を仕留める為に飛ばした空き缶だったが、意外にも二人とも倒れているのを見て疑問を抱く。だがそれを振り払いう。

「恨んでくれても構わんよ」

見下しながら背中を向けて立ち去る木山。

しかし、木山の腰が何者かの腕によって捕まる。

「つっかまえた〜」

「ッ！馬鹿な！」

掴んでいたのは驚くことに先ほど爆発を喰らって倒れたはずの御坂

だった。
磁力で即席の盾を作って爆発を防いでいたのだ。
「零距離からの電撃……。あのバカには効かなかったけど、いくらなんでもあんなトンデモ能力まで持ってないでしょうね」

「くっ！」
鉄骨の槍が御坂に向かって飛んでいく。が、それよりも先に御坂の電撃が当たる。

「喰らえ！」
御坂が叫ぶと同時、大量の電撃が木山を襲い、絶叫が辺りに響き渡る。
数秒後、電撃が止んで木山はガクッと御坂の腕の中でうなだれていた。

「ったく」
木山が気絶しているのを確認した御坂が安心したように息を吐く。
終わった、とそう思っていた。

『先生！』
何処からか子供の声が聞こえた。無邪気な子供の声が。

御坂の様子がおかしいな・・・。一体何が？

「おい、御坂！大丈夫なのか！？」

ガシッと御坂の肩を掴むと、御坂は木山を離し、木山は地面に倒れこんだ。

「今のは・・・・・・」

「今の？お前、何を言って？」

「見られたのか……」

意識が回復したらしい木山が頭を抑えながら呟く。
一体、見られたって何を？

「今、木山の記憶が・・・。何で、何であんなことを！」

「アレは表向き、ＡＩＭ拡散力場を制御するための実験とされていた。が、実際は暴走能力の法則解析用誘爆実験だ。ＡＩＭ拡散力場を刺激して暴走の条件を知るのが目的だったというわけさ」

「じゃあ！」

「暴走は意図的に仕組まれていたというわけさ。もっとも、気づいたのは後になってからだがね…」

「人体、実験……」

「あの子達は一度も目覚めることなく、今尚眠り続けている。私達はあの子達を使い捨てのモルモットにしたんだ！！」

あの子達？それは誰のことを……。そういえば前に木山は教鞭を振るってたとか言ってなかったか？
だとしたら……。

「でも！そんなことがあったならっ！警備員に通報して！」

「２３回！あの子達の回復手段を探るため、そして事故の原因を究明するためのシミュレーションをするために樹形図の設計者の使用を申請した回数だ。樹形図の設計者の演算能力を持ってすれば、あの子達を助けられる筈だった。もう一度太陽のしたを走らせてやることもできただろう。・・・だが却下された！２３回全てだ！」

「えっ」

「統括理事会がグルなんだ！警備員が動く訳がない！」

統括理事会って学園都市上層部か？
この事件を起こしたのはその子供達を助けるためだったていうのか？

「だからって！こんなやり方！」

「君に何が分かる！あの子達を救う為なら私は何だってする！この街の全てを敵に回しても、止めるわけにはいかないんだぁ！」

木山が絶叫する。それは獣のような咆哮だった。
しかし、突然木山が頭を抱えて苦しみだした。

「ちょっと！」

「ネットワークの暴走……」

ドサッともう一度木山が倒れる。そして、木山の後頭部。そこから何かが飛び出した。
一見すると胎児のように見える。それは、カッと目を開くとすさまじい雄叫びを上げる。

「ギャアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！」

「肉体変化（メタモルフォーゼ）？こんな能力聞いたこと……」

幻想御手　？　暴走（前書き）

遅れましたすいません・・・
だってテスト・・・・・
ではどうぞ～！

幻想御手　？　暴走

その胎児は雄叫びを上げる。

次の瞬間、衝撃波が周りの瓦礫を３６０度に吹き飛ばす。

神成は周りに窒素を集め、御坂は磁力で即席の盾を作り、瓦礫から身を守る。

「とにかく、あれを止めなくちゃ！！」

そう叫んだ後、御坂は胎児目掛けて電撃を放つ。

電撃は胎児に当たり、当たった部分がはじけ飛んだ。

しかしその部分はすぐに再生され、胎児全体が少し大きくなった。

「何……あれ…大きくなってる！？」

御坂が驚きの表情で言う。

しかしその時、初春が柱に隠れているのを見て

「初春さん！？こんな所に降りてきちゃ、駄目じゃない！！」

と怒り気味に言うがそれよりも胎児のような奴の方に注意を向ける。

「とにかくやるってんなら、相手に……」

電撃を両手にまとわせながら御坂が言う。しかし胎児は御坂の方を向かず、高速道路から離れた所に立っている建物の方に向かっていく。

「意思はなく、ただ暴れているだけ？」

「そうだ、木山は！？」

御坂が言うが先程木山が倒れていた所には誰もいなかった。

おそらく、物陰に行ったのだろうと3人は木山を探しに行く。

「まさか・・・幻想御手（レベルアッパー）から、こんな怪物が生まれるとはな・・・学会表彰物だな……」

木山は高速道路の柱にもたれながら呟く。

木山の所についてすぐ初春は先程まで手錠を掛けられていた手首を木山に見せる。

「これ、木山先生が外してくれたんですよね？」

初春が尋ねる。勘のいい娘だ。と、木山は思う。

「ただのきまぐれだ。それで、何か用かな？」

「あの怪物を止める方法を教えてください。あれを生み出したあなたならわかるはずです」

初春が言う。

その真っ直ぐな視線に、木山は思わず目を背けたくなる。

しかし目は背けずに、木山は答える。

「あの怪物は、幻想御手（レベルアッパー）で集めた１万人分のＡＩＭ拡散力場の集合体。仮に幻想猛獣（ＡＩＭバースト）とでも名付けておこう」

その時、胎児、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は建物に向かって進んでいたが、突然方向転換した。

高速道路上では、警備員（アンチスキル）が、実弾を発砲したからだ。

複数の人がマシンガン系の銃を使っているのだろう。弾丸の数が半端ではない。

しかしその全てが幻想猛獣（ＡＩＭバースト）に吸収され、巨大化

させている。

「幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は幻想御手（レベルアッパー）のネットワークから生まれたものだ。なら、そのネットワークを破壊すれば、あれを止められるかもしれん」

木山が言う。初春はスカートのポケットから治療プログラムのメモリを取り出す。

「これですね。分かりました」

初春はそう言うと、ポケットの治療プログラムのメモリを大切にしまう。

おそらくあのメモリの中に幻想御手のネットワークを破壊するプログラムがあるのだろう。

「なら、私とコイツであれの注意を引き付けるから、初春さんはそれを警備員（アンチスキル）に渡してちょうだい」

「はい！！」

「初春、任せた！」

それだけ言うと、空気の塊を思い切り蹴り、高速道路の上に行く。

御坂は、磁力を利用して一気に高速道路まで上る。

初春は先ほど降りた階段を使って、警備員（アンチスキル）の所に向かう。

「おらああ！！」

その声とともに、自分の周りに窒素を集め、それを弾丸のように射出する。

幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の全身に当たり、その部分を破壊するがすぐに再生する。

今度は幻想猛獣（ＡＩＭバースト）が頭上に光弾を作りそれを放つ。しかしそれをうまく回避し、再び窒素の塊を飛ばす。

が、すぐに再生してしまう。

そして幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は再び光弾を作り出た。

今度は拡散する様に飛ばして来る。そしてそのうちの１つが、階段に向かって飛んでいく。

その階段には初春が、今まさに昇っていた。

しかも運が悪いことに、光弾は初春がいた所の手すり部分に当たった。

「初春！！」

そう叫ぶが、ここで叫んでいても意味はない。
と思い、無事でいるだろうと自分で解釈する。
もうすでに幻想猛獣（ＡＩＭバースト）が、ある建物に向かい動き出していた。
「くそっ！！！」
瞬時に能力を足元に展開し、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）のすぐ近くに行く。
そして、互いに攻撃をする。
２人の攻撃は幻想猛獣（ＡＩＭバースト）の別々の所に命中するが、すぐに再生してしまう。
「キリがないわね……。だったら！！」
御坂はそう言うと、右手を地面につける。
そして磁力で砂鉄を集め、槍を生成し、一気に飛ばす。
しかし、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は氷塊を出現させ、砂鉄の槍を防ぐ。
そして、何本もの触手を１本に束ね、御坂に襲い掛かる。

御坂はかわそうとするが、足首を絡められてしまう。

「なっ、しまっ」

御坂が言い終わる前に、幻想猛獣（ＡＩＭバースト）は触手を振り回す。

そして御坂を施設の外壁目掛けて投げる。

御坂は電撃で磁場を作り、上手く着地する。それでも勢いは抑えきれず、膝に痛みが走った。

「御坂！大丈夫か！？」

「なん・・・とかね」

「ここ原子力発電所だろ？　仕方ねぇ・・・ここはちぃっと気合出す」

そう一言呟き、行動を開始する。

禁書目録救出作戦　改修版（前書き）

何かおかしい…そんな所が多々あると思いますが
気にしないでください・・・

ではどうぞ～！

禁書目録救出作戦　改修版

あの戦いの後、神裂にステイルを呼んでもらいそして当麻のアパートに集まり
インデックスについて話すことにした。そして

「で、話というのはなんだい？インデックスを助ける方法があるとかいうことだそうだけど」

ステイルにはまだ内容を話していなかったので当麻は事の次第をステイルに説明した。

「冗談・・・だろ。じゃあ！僕たちのやってたことは一体…！？」

そう思うのは当然だった。インデックスの記憶を消すことがただ一つの方法だと信じ感情を無理やり押しとどめていた。だがそれは最大主教（クビショップ）のついていた『嘘（アー）』

どんな思いで自分や神裂がインデックスを追って記憶を消すことを決めたと思っているのか。それを知りつつあの最大主教は自分たちにその仕事を与えたのだ。

確かにイギリス清教にとっては正当な手段ではある。自ら作り出した魔導図書館をわざわざ危険に晒すことなどする必要は無い。もしするならば『首輪』をつけても当然だ。

「話は理解した。だがどうやってそれを破壊するつもりなんだい？禁書目録にかけるほどの魔術だ。普通のものではないだろう？」

「助ける方法は上条の幻想殺し（イマジンブレイカー）だ」

神成が答えた内容に魔術師二人はいまいち理解が及んでないようだった。

仕方ないだろう。上条と戦ったことがあるとはいえそれがどんなものなのか正確には分からなかったからだ。

めんどくさそうに神成が

「こいつの右手は幻想殺し（イマジンブレイカー）って言ってな？それが異能の力ならばありとあらゆるものを打ち消すことができるっていう代物らしいぜ？。例え超能力だろうと魔術だろうと関係無くさ・・・。」

「つまりコイツの右手で彼女を救えるって訳かい？・・・笑えない話だね。でもそれで彼女が救われるのならここは君たちに任せてよう。いいかい？神裂」

「ええ。私も異論はありません」

「よし！ならまずは準備とかあるだろうし三日後の十時に小萌先生の家集合な。上条！小萌先生には別の所に泊まる様に言っといてくれ！」

「よし！何とかするよ」

そして再び集まるまでの三日がたって

インデックスは、布団で眠っており意識があるかはよく分からなかった。

そして約束の時間になり・・・

「そろそろ十時だよ？準備はいいかい？」

ステイルがそう言うとそれぞれが頷く

「よし！じゃあ当麻頼む」

任せろ。と呟いて上条はインデックスに近寄った。すでにインデックスに意識はなかった。

「でもどこにその魔術があるんだ？」

「おい…上条。バカか？体触ってなんとも無かったら体内しかねぇ

だろ？たとえば口とか」

「そうだな…」

そう上条が言ってそして

「あった！のどの奥だ！！」

そして上条は布団に横たわって寝ているインデックスに近付いて唇に人差し指で軽く触れる。
そして自分の右手を眠っているインデックスの口の中へと入れた。
その、のどの奥に進めた右手は…魔術に触れた。

「ッ！」

ぶしゅっ！そんな音と共に手が事細かく切り刻まれたかのように裂けてその手から出た血がポタポタと畳にたれる。と同時にインデックスがカッと目を見開き、彼女の周囲には衝撃波が巻き起こり、当然のように上条は吹き飛ばされる・・・が壁に叩きつけられる前に神成が受け止めた。

「警告、第三章第二節、Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ－－－－－－－－禁書目録（インデックス）の『首輪』　第一から第三までの全結界の貫通を確認。再生準備・・・・・・失敗。『首輪』の自己再生は不可能　現状、１０万３０００冊の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」

その目に真っ赤な魔方陣を出現させ、インデックスは機械的に言葉を口にする。

「オイオイ・・・嘘だろ！？」

「馬鹿な・・・！あれは魔法陣！？そんな…あの子に魔力は存在しないはずでは？」

「どうやらそれすらも教会の嘘だったみたいだね。インデックスは魔術を使えないんじゃない。侵入者を撃退するシステムの為に全て使われていたようだ！」

「『書庫』内の１０万３千冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算・・・失敗。
該当する魔術は発見できず。対侵入者用の汎用術式を組み上げます」

「侵入者個人に対して、最も有効な魔術の組み込みに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動。侵入者を破壊します」

その言葉と同時に、インデックスの両目にあった魔方陣が、直径二メートルほどの巨大な魔方陣へと拡大し、その輝きを増す。

次の瞬間　光の柱のような物が一直線に襲い掛かってくる

そしてギリギリで当麻の右手が間に合い、なんとか防いだ。
インデックスから放たれた光の柱。それを防ぐために当麻が右手を突き出す。
光の柱が当麻の右手と衝突すると、四方八方へ光の柱が飛び散っていく。
しかし、光の柱が消滅することはなく徐々にだが、当麻が押されてきている。

その時、インデックスから感情の無い言葉が聞こえてきた。
「『聖ジョージの聖域』は侵入者に対して効果が見られません。他の術式に切り替え、侵入者の破壊を継続します」

そして、光の柱の勢いがさらに増す。

幻想殺し（イマジンブレイカー）の処理が追いつかず、逆に上条の右手が嫌な音を立てて砕ける。そして勢いに押され右手が弾かれる。

「危なっ！！」

禁書目録救出作戦　改修版（後書き）

はい～と言う訳でここで一回きります・・・

なかなか疲れるのですよ…

次でインデックスの所を終わらせます。

記憶を消すか否かとても迷っているので次はちょっと遅れるかもです・・・。

ではまた次回お会いしましょう！

三万突破記念！

ＰＶ３００００突破！！
ユニーク１００００突破！！（大体一万）

ありがとうございます！
こんなにいくとは思っていなかったのでとても嬉しいです！
自己満足な感じになりがちですが、そんな作者をどうぞよろしくお願いします。

大体原作１８巻位まで想像できている自分って・・・

さてさて、何かヒロイン的な人物を考えているのですが
どんな能力がいいのやら・・・

頭を抱えながら考えているのでしっかりと内容を濃く出来ればと思います。

では！また次回にお会いしましょう～

終焉（前書き）

遅れやした！

ではどうぞ～！

終焉

右手が砕ければ、上条はそのままでは生きてはいられなかったであろう。
だがそれは上条当麻一人だった場合の話。
そう。一人だけならば・・・

「危ねぇだろォがァァァ！！！」
インデックスから放たれた光の柱。
それに向かって、能力を展開させた左手で思い切り殴る。
「ウオォォォォォォォォォォォ！！」
拳を勢いよく突き出し自分の全力を込める。
神成の左手と衝突する光の柱。しかしそれ以上は進まない　いや、進めない。
両者の力がほぼ同じなのでそのまま拮抗している。
「大丈夫なのか？それは俺の幻想殺しでも打ち消せなかったんだぞ

！」

「何とかな！だがそんなには持たねェぞ！！」

上条達は信じられないと言うような顔をしていた。

「これは『竜王の殺息』ですよ！？どうしてただの人間がそれを受け止められるのですか！？」

「その通りだ！彼は本当に人間かい？片腕であの『竜王の殺息』と拮抗するなんて・・！」

「ごちゃごちゃうるせェよ！それよりさっさとインデックスを助けろ！俺の左腕が吹っ飛んじまう！！こっから先はお前の出番だろォォォ！」

「分かった！任せとけ！」

神成の声とともにインデックスに向かって走り出す。

その時、神成が右腕を光の柱の下側に構えたかと思うとその右腕で光の柱をまるでアッパーのように殴りつけた。

「この野郎ォォォォォォォォ！！！」

力強い声とともに『竜王の殺息』の向きを無理やり上へと捻じ曲げる。

すると小萌のアパートの天井を突き抜けて上条達の前から見えなくなった。

その隙に、神成が上条に向かって能力を展開させた左腕を突き出すと衝撃波が発生し、上条がインデックスの所に一瞬でたどり着く。

「早く助けてやれ！ヒーロー！！」

神成が叫ぶ

しかし

「駄目です！上！！」

インデックスの周りに上空から現れて漂うたくさんの光の羽根。

それは上条に降りかかろうとしているが、一直線にインデックスへと向かう上条はその足を決して止めようとはしない。

（神様。この世界がアンタの作ったシステムの通りに動いてるって言うのなら！）

上条は力強く握っていた自分の拳を思いっきり開く

「オイ！一旦戻れ上条ォォォ！！」

止まるように上条に叫ぶ神成の声。だが上条は止まらない。

「まずはその幻想をぶち殺す！！」

インデックスに向かい、その右手を振り下ろす。
その右手が、インデックスへ触れると魔方陣はパキンと音を立てて崩れた。

「警、告。最終……章。第　零……。
『首輪』致命的な破壊……再生……不可…」

インデックスの言葉は途中で途切れる。インデックスの『首輪』が破壊された事で、意識を失ったのだ。
そして体を傾け、倒れるインデックスを当麻はやさしく抱き寄せた。
しかし、神成達の悲鳴ともいえる叫び声が響く。
赤く部屋の中に張り巡らされていた魔方陣が消え、光りの差し込む空間に、純白の汚れなき羽根が舞う。
それは当然のように、上条当麻の頭上にも降り注いでいた。

気絶しているインデックスを抱えている当麻は、光の羽を避けることは出来ない。
その時、上条が何かを呟いた。

「　　」

そして、彼の頭の上に一枚の光の羽が舞い降りた。

この日　上条当麻は『死んだ』

日常（前書き）

またまた遅れてしまいました・・・スイマセン！

あと　次回の話は書くのを忘れていたＡＩＭバーストを、どこかの話に割り込ませますのでお見逃し無く～！

では！どうぞ～

日常

「まったく…君も無茶な事をするね？」

病院の診察室で、小太りで身長の低いカエル顔の医者はそう言った。椅子の上をくるくると回っている彼の胸元のＩＤカードには、自分がカエルに似ている事を自覚しているのかは分からないが、小さなカエルのシールが貼られていた。

そう言う医者の前には、左腕を包帯でぐるぐる巻きにされている神成がいる。

ついさっき検査が終わってその結果を聞いていたのだ。

「あんまり無理をしていると本当に死んじゃうよ？」

「そうですか…」

神成は医者の話をあまり聞いていなかった。

それもそうである。聞くまでも無い事であったから。

なぜならその検査の結果は、自分が想像していたのと一ミリも違っていなかったのだ。

その結果というのはまず、左腕の骨の特に手の指が複雑骨折　腕のほうは骨にヒビが入っているようだった。

「それにしても、この学園都市の中にＩＤを持たない人間が三人もいたとはね？謎の光線に人工衛星が一基撃ち抜かれたって話だし今頃、警備員（アンチスキル）と風紀委員（ジャッジメント）はてんてこ舞いになっている事だね？」

ＩＤを持っていない人間が三人。一人はインデックス、一人はステイル・マグヌス。そして最後の一人は神裂火織。
まぁその二人は何時の間にやらどこかに行ってしまったようだが…

「ところで君宛に手紙を預かっているよ？」

カエル顔の医者は机の引き出しの中から封筒を取り出すと、神成に渡した。
それを受け取り、中の手紙を取りだした。

差し出し人の名前は『神裂火織』
中身を読んでみると、なにやらインデックスの事についてかいてあった。
それを読んで最後のページをみるとなにやら重要な事が書いてあった。

『あの子とそれを取り巻く環境について説明しておきます。
イギリス正教は大至急あの子を連れ戻したがっていましたが、現状維持という事でいいのでしょう。あまり焦った様子はありませんでした。実際のところは様子見と言ったところでしょうか。
自動書記（ヨハネのペン）を失った事で、あの子の魔力が回復する可能性もあります。その場合は我々も相応の体勢を整えなければなりません。もっとも、あの子の魔力が回復する事はあり得ないと思いますが、注意するに越した事はありません。一〇万三〇〇〇冊の魔道書とはそれほど危険なモノだと、改めて認識しておいてください。』

ちょうどそれを読み終わった頃、医者がなにやら話をしてきた。

「あの少年の事なら、説明するよりも直接会って確かめた方が早いよ」

コンコン。と病室の扉を二度ノックして、乾いた音が病院の廊下に響いた。
しかし、はいという普通の返事返ってくる事はなかった。その代わりにギャァァァァ！！という絶叫とも悲鳴つかない、断末魔の叫びのようなものが聞こえてきた。
その声を聞いて急いで病室に入ると、入れ違いでシスターが怒りながら出て行った。
すると今まで通りに見える上条当麻が病室に寝ていた。まぁ色々と散らかってはいるが…。

「上条・・・？」

「あ、あー、おう！！、どうしたんだ？もしかして俺の…」
ぎこちない返事が返ってきた。それで確信した。こいつの記憶は本当に無いんだと…。
「お前…記憶無いんだろ？嘘なんかつかないでくれよ？」
そう言うと上条は、申し訳なさそうに
「…ごめん俺、何も覚えて無いんだ」

「それはまずおいておこう。それよりもまず、何でインデックスに嘘を言ったんだ？」

「確かに…良く考えれば俺は酷い事をしたのかも知れない…でもあの娘には笑っててほしい。そう思ったんだよ」

上条当麻は何一つ変わっていなかった。

「上条はどうなっても上条だな…なにも変わってないみたいだ・・・」

「・・・案外覚えてるのかもな」

「おいおい…上条。医者が言うには脳細胞ごと記憶が吹き飛んでんのにどこにそんな事を覚えてるって言うんだ？」

「そんな事、決まってんじゃん。心にだよ」

「あっははは。やっぱり変わってねぇよお前」

「んじゃあそろそろ帰ろうかな・・・って　あァァァァァァ！！！」

「どうしたんだよ！？ここは病院だぞ！」

「お前！その右手の事は覚えてっか？」

「ん？まぁ～一応は…それがどうかしたのか？」

「どうかしたじゃなくて！その右手の正体ってか本質みたいなのは覚えてないか？聞くのすっかり忘れてた！」

そう聞いてみるが…

「幻想殺しの正体？・・・すまん。覚えて無いみたいだ」

「そうか…まぁいいさ。その内分かるかもしんねぇから」

その後も二人は会話を続けた。

記憶喪失の上条との、僅かな溝をうめるかのように…

判明した原作との違い

ここまで続けてきて判明した原作との違い

木山戦とＡＩＭバースト戦がインデックス救出の３日間に移動している。

←

八人目のＬＥＶＥＬ５がいるという事で原作とは時間軸がずれている。

と解釈しちゃってください。

次の更新はもう少し早くしたいのですがなかなか時間がないのです・・・。

多めに見てください。

ＡＩＭバーストはあと２話で終わりです。

それからは禁書目録のほうが中心で動きます。

それとＰＶ５００００突破しました！

ありがとうございます。

まだまだ足りない所もあると思いますがよろしくお願いします！

ついでに言うと新キャラの能力を考えているのですがなかなか思い浮かばないので登場はもう少し後になりそうです。

幻想御手　？　　ご覧ください。前回の？の下にあります。

では！また次回お会いしましょう。

外伝　たとえばこんな世界

「お、おなかへった…ご飯くれるとうれしいな」

「あァ？」

そこには、

白い修道服に身を包んだ少女がいた。

「おなか減ったって言ってるんだよ？」

「オイオイ…なンなンですかァ？　この馬鹿みてェな状況はよォ…」

ある日、とある少年が一人の少女と出会った。
その少女は、その身にとても複雑な事情を抱えていた。
そのことに同情したわけではないし、共感したわけでもない。
しかし、、様々な奇跡と偶然が重なって、少年は少女の抱える事情に顔を突っ込んでいく。

これは、ある意味では喜劇で、そしてある意味では悲劇の物語

とある魔術の一方通行

外伝　たとえばこんな世界（後書き）

何か思いつきで・・・やってしまった感はなきにしもあらず…。

話は変わって、これからの更新ですが、いままでどうり一週間に一回で進めます。

ＡＩＭバースト編はあと一話で終わり、禁書目録の方中心で回ります。

これからもよろしくお願いします。

ＡＩＭバーストの新しい話もしっかり割り込みで入っていますんでよろしくお願いします。

ちなみに一方通行の話は何かの記念ごとにやると思います。

赤点取ってしまった・・・　泣きたいな・・・

ではでは～また次回お会いしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6193s/

とある超人の地震人間

2011年7月11日20時53分発行